

かごしまの 昔話

「稚児が淵」



昔、薩摩川内市高城の領主にまだ元服前の若君がおりました。若君は、馬で高城川の浅瀬を渡り、お寺に行つて手習いをするのが日課となつておりました。

ある朝、若君はいつものように川を渡り始めました。すると上流から杯がひとつ流れてきます。朱色に豪華な金蒔絵の施された美しいものです。思わず、馬の背から体を浮かせた若君は、片手を水面にさしのべました。そのとたん、体勢をくずして川に落ちたのです。そしてあつという間に下流の深いところに流されていきます。お供が河岸を懸命に走って追いかけて、若君を引き上げたのですが、もう息絶えていました。



突然わが子を失った殿様は悲しみにうちひしがれ、言葉もなく亡きがらを見つめるばかりでした。そのうち、怒りがフツフツとわきあがってきて、

「毎日通うておった所で、あの子が落馬するなど、信じられん。これは、ガラッパ（河童のこと）どもが川に引き込んだに違いない。ガラッパどもを追い出せ。高城川の水を沸騰させよ」と言ったのです。その言葉はガラッパたちに届けられ大騒ぎになりました。川の水が熱湯になったら大変、住むことができません。急ぎ集まり相談して、自分たちの非を詫びた文に「今後、高城の皆様を水死させることは絶対致しません」ということを書き添えた詫び証文を殿様に差し出しました。そうすると、殿様の怒りはやわらぎ、「その

誓いをきつと守れよ」と許してやりました。

それから後、若君が水死した所は、稚児が淵と呼ばれるようになりました。そこは現在でも青くよどんでおり、岸边には「稚児が淵」という立て札があります。河童の詫び証文は川底の岩に彫られているという言い伝えがありますが、どこかわかりません。

なお、一説によると、お供は六人であつたそうです。六人は若君のあとを追つて殉死し、葬られたところには六本の杉が植えられていたと伝えられています。

原話『川内地方を中心とする郷土史と伝説』
文／有馬英子 絵／二石綱夫